平成 25 年度　博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること）

子育てひろばに通う母親の居住年数の違いによる「付き合い・交流」の実態
―ソーシャル・キャピタルの視点から―

学位の種類：　修士（　看護学　）
人間健康科学研究科　博士前期課程 人間健康科学専攻　看護科学域
学修番号　11894604
氏　名：栗原　明子
（指導教員名：　安達　久美子　）

注：1 ページあたり 1,000 字程度（欧文の場合 300 ワード程度）で、本様式 1～2 枚（A 4 版）程度とする。

目的：都市部の子育て世代の転入出の多い地域において、子育てにおける付き合いや交流をソーシャル・キャピタルの視点で分析することは、地域での母子の交流支援のあり方や、居住年数の短い母親の孤立予防支援を検討するうえで必要である。そこで、子育てひろばに通う母親の、現地域での居住年数の違いによる子育てにおける「付き合い・交流」の手段・広さ・深さの実態を明らかにすることを目的とした。
方法：東京近郊で平成 23 年合計特殊出生率が全国平均より高い A 市において、市が運営する子育てひろば及び、同市で母性看護学研究室が実施する子育てひろばに参加した 3 歳未満の子どもをもつ母親 277 名を対象に、基本属性、居住状況、社交性、友達づくりの積極性、子育てひろばの利用回数、「付き合い・交流」の手段・広さ・深さ、子育てを通じた付き合いの満足度について自記式質問紙調査を行った。
結果：181 名から有効回答を得た(有効回答率 65.3%)。対象者の居住年数は、2 年未満では 60 名、2 年以上では 121 名であった。子どもの年齢は 2 年以上が 2 年未満より高かった。家族以外の人と子育てに関する話を直接会ってする頻度は、2 年以上が 2 年未満よりも多かった。自分や配偶者の友人、近所の知人に育児を助けられていると感じる者は、2 年未満と 2 年以上の母親の 30%程度であったが、多くの母親は子どもの年齢が同じ母親と交流が広がるとした。また、2 年未満は、自分の母と公的な相談機関に育児を助けられているとした者が多かった。
考察：A 市の子育てひろばに通う母親の直接顔を合わせるネットワークは、居住 2 年以上の母親に多く、居住年数が長くなることで母親同士の関係が深まっていくことがわかった。反対に、居住年数が短い母親は、直接会って顔を合わせるネットワークが少なく、母親同士の交流が持ちにくいことが示された。また、地域に育児を助けられていると感じる者が少なく地域との関係が薄いことが伺えたが、子どもの年齢が同じ人と人間関係が広がった母親が多いことや、居住 2 年以上で直接顔を合わせるネットワークが構築されていることから、今後地域に母親同士のネットワークが広がる可能性があると考える。一方、2 年未満の母親は、自分の母親と公的な相談機関に育児を助けられていると感じていたが、これは 2 年未満の母親の子どもの年齢が低く援助をより必要とすることが影響している可能性がある。A 市の様に住民移動の多い地域では、居住年数の短い母親の支援が必要である。子育てひろばを含めた支援のリソースの周知、そして、子育てひろばでの支援にあたっては、転居間もない母親でも気軽に参加でき、母親同士のディスカッションや共同作業等、その後の子育てネットワークへとつながるような働きかけが必要である。